



フタスジヒメハムシの密度を抑えて品質・収量がアップしました。今年の目標収量は反あたり200キロです。

富山県砺波市 JAとなみ野 経済部 雄川 勉さん

JAとなみ野の担い手支援、特産振興、営農指導を担当。管内の大豆はほぼ100%エンレイで、作付面積は約1100ha。今年からクルーザーFS30が防除暦に採用され、管内農家の指導に奔走している。



排水対策は春先に、土づくりは鶏糞中心で。 病害虫防除は、品質・収量を左右します。

JAとなみ野管内では、100軒を超す大豆農家が約1100haの大豆を作付。法人や任意組織が多く、その平均作付面積は15～20haにおよぶといえます。大豆栽培のポイントについて、同JAの雄川 勉さんにお聞きしました。

「まず排水対策、そして土づくり、病害虫防除ですね。排水対策は、春先にやるのがベスト。土づくりは、鶏糞を中心に施肥するように指導しています」。

管内の大半を占める大豆単作の場合、5月下旬から6月上旬にかけては種、7月中に培土を2回、8月中に病害虫防除を2回と適宜除草、10月中旬に収穫を迎えます。

「問題害虫はアブラムシ類とフタスジヒメハムシ。なかでもフタスジヒメハムシは、着莢数・着粒数の減少や子実の食害をもたらす、品質・収量に大きく影響するので、最重要害虫といえますね」。

フタスジヒメハムシの密度を抑制し、収量が2割ほどアップしました。

JAとなみ野では、昨年の試験使用を経て、今年からクルーザーFS30(以下、クルーザー)を本格的に導入。管内採種圃場の種子に、クルーザーと殺菌剤を塗抹処理したものを、生産者に販売供給しています。クルーザーは、大豆の品質・収量面で大きな効果を上げている、という雄川さん。

「まず、大豆生育初期のフタスジヒメハムシを抑えることで、夏場の発生密度も低くなり、8月上中旬に散布していた他殺虫剤を省くことができました。初期生育もいいし、葉や子実の食害はほとんどありません。昨年クルーザーを導入した生産者の皆さんは、収量が2割ほどアップし、品質も向上したという実績があるので、今年は管内全体での品質・収量向上に期待しているんですよ。今年の生育は良好です、と雄川さん。10aあたり収量180～200キロをという目標に、期待がかかります」。



syngenta.

シンジェンタ ジャパン株式会社

〒104-6021 東京都中央区晴海1-8-10 オフィスタワーX 21階
<http://www.syngenta.co.jp>

農薬をご使用の際は、ご購入先、または当社ウェブサイトなどで最新の登録内容をご確認ください。

®はシンジェンタ社の登録商標 TMはシンジェンタ社の商標

●使用前にはラベルをよく読んでください。●ラベルの記載以外には使用しないでください。●薬剤は小児の手の届く所には置かないでください。●使用後の空容器、空袋等は圃場などに放置せず適切に処理してください。

※2009年1月20日現在の情報です。